Japanese Association of Educational Psychology

Jap. J. of Educ. Psychol., VOL. IX, No. 3 (1961)

親子関係と幼児のパーソナリティの発達*

お茶の水女子大学
津守　真　横山峰子
磯部景子　下坂雅子
津田塾大学　東京大学
仁科弥生　長塚和弥

I 問題

幼児のパーソナリティの発達が親子関係によつて規定をうけることが多いことは，すでに多くの研究によつて指摘されている。幼児前期の1，2才児の依存性と従順性（反抗）とは親子関係と密接な関係があることは，津守・稲毛（1960）によつて報告されており，また4，5才幼児のパーソナリティの発達がそれ以前の親の育児態度および現在のしつけ態度と大きな関係があることは，Sears, R. R.; Whiting, J. W. M.; Nowlis, V. & Sears, P. S. (1953), Sears, R. R.; Maccoby, E. E. & Levin, H. (1956) などにより研究されている。
とくに Sears, R. R. et al. (1953) において，幼児のパーソナリティの変数として，攻撃と依存が有効適切な概念であることが示されている。そこで親の行動変数としてとりあげられているものは punitiveness と nurturance とである。親と子の行動はたんに平行的な相関関係があるというだけでなくて，ダイナミックな相互作用をもつものである。

子どもの反応能力に応じて親の行動は子どもに作用し，子どもの行動体系が形成されてゆく。この親子関係の行動のダイナミックスを明らかにすることが本研究の目的である。

この研究においては，子どものパーソナリティ変数として，攻撃および依存をとりあげるとともに，優位性，非協力性，従属性，愛情等を考慮にいれ，とくにそれらの変数が全体としてどのような分布を示すかを考慮にいれてとらえようとした。このような行動変数の規定条件として考えるべき親の行動変数としては，罰の厳しさと受容度，肯定的否定的態度と積極的受容的態度をとりあげた。そしてこの両者の関係を明らかにすることにより親の態度が子どもにどのように作用して子どものパーソナリティを形成してゆくかを考察しようとしたものである。

II 被験者

お茶の水女子大学附属幼稚園児，4，5才児，合計71名，内男児36名，女児35名およびその母親，幼児の生活年令は4才7カ月より，6才1カ月にわたり，男児平均5才5.6カ月，標準偏差4.2カ月，女児平均5才5.7カ月，標準偏差4.4カ月，知能指数は97から158にわたり男児平均127.1，標準偏差12.1，女児平均120.7，標準偏差15.2，知能年令は男児6才11.5カ月，標準偏差9.8カ月，女児7才1.2カ月，標準偏差12.9カ月である。子どもの知能程度は著しく高いといえる。両親の教育程度も高く，父親は大学または旧制専門学校卒が大部分であり，母親は，高女，短大，大学卒が大部分である。

III 方法

1 幼児のパーソナリティ特性

〔1〕 行動観察

幼稚園における遊びをあらかじめ定めたカテゴリーにしたがつて記録する。タイムサンプリングにより各クラスごとに名簿のうえで出発点をずらしてゆき，観察時刻

---

* Development of a child's personality and the parent-child relationship.

本研究は，文部省科学試験研究費による「ドル・プレイテクニクによる幼児の人格診断」（研究代表者・依田新）の一部をなすものである。

** by Makoto Tsumori (*Ochanomizu Women's University*), Yayoi Nishina (*Tsuda College*) and Others.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

がずれるようにした。1回の観察時間3分，1名につき20回観察，合計1名60分の観察である。観察場面は自由遊びの場面に限つた。クラスの人数は38名，教師は1名であるが，週に2日実習生が2〜3名参加する。観察のカテゴリーは次のとおりである。

攻　撃　他人を傷つける行動，身体的なものおよび言語的なものをふくむ，また物に対する攻撃をふくむ。

優　位　命令する。相手に話しかける，誘いかける，サジェスションを与える。

非協力　相手からの働きかけに対して従わない。

従　属　相手からの働きかけに対して従う。

依　存　相手に対して身体的に接触，近接を求める。注意，承認，助力を求める。
　これは教師に対するものと子どもに対するものを分ける。

愛　情　他人に対して思いやりや同情を示す。身体的なものと言語的なものとをふくむ。

活動の量と質(エネルギー)　やつていることにどのくらいエネルギーを投入しているかをみる。これはたんに身体的活動量のみでなく精神的エネルギーをふくむ。

観察は30秒を単位とし同一の行動が30秒以上継続するときは2つの単位に数えた。

観察の信頼度　(i) 観察者間の一致度，観察は全被験者について1名の観察者があたつた。その中7時間分について2名の観察者が同一児について同時に記録し，一致度をみた。観察者間の一致度は，各項目ごとに3分間で一致した数と一致しなかつた数とをかぞえて，全体に対する一致した数の比をとつた。その結果は平均79.6%であり，だいたい信頼できる一致度を得ている。

(ii) 自己折半法による信頼度　各行動の恒常性あるいは記録の均一性をみるために各項目ごとに，奇数回と偶数回の数をかぞえて折半法による相関係数をとり，観察の信頼度をみることにした。その結果は Table 1 のとおりである。

Table 1　行動観察の自己折半信頼度

	攻撃	優位	非協力	活動量	従属	依存(大人)	依存(子ども)	愛情
4才児	*.42	**.85	**.68	**.65	**.67	**.78	−.10	**.48
5才児	**.47	**.80	**.65	**.93	**.91	**.59	.27	*.37

*…5%水準で有意　　**…1%水準で有意

以上の結果により，〔子どもに対する依存〕以外の行動項目は有意な相関を示しており，観察の結果は信頼することができると考えてよいと思う。子どもに対する依存は信頼度が低いので，結果から省くことにした。

(3) 教師の評価と行動観察との比較

行動観察に用いたのと同じ行動について，行動観察と同時期に担任教師の評価を求めた。

評価は5段階とし，1・5はそれぞれ約2名，2・4はそれぞれ約8名，3は約15名として評価を求め，結果は5・4を上，3を中，2・1を下と3段階にして比較検討を行なつた。行動観察も上中下3段階にして比較をした。結果の例はTable 2 に示すとおりである。

Table 2a　攻　撃
教師の評価と行動観察との関係

教師＼観察	上	中	下	計
上	5	4	1	10
中	2	7	4	13
下	2	6	4	12
計	9	17	9	

Table 2b　優　位
教師の評価と行動観察との関係

教師＼観察	上	中	下	計
上	7	2	2	11
中	4	10	2	16
下	0	4	4	8
計	11	16	8	

Table 2 の例にみるように，教師の評価は行動観察の結果とだいたい一致している。しかし子どもに対する依存性については，ここでも教師の評価と観察との間の一致がみられなかつた。この項目は評価観察の困難な項目と考えられる。その他の項目については教師の評価は行動観察と傾向としてはだいたい一致しており，この点でも行動観察の結果は信頼することができるといえる。

〔2〕 母親との面接による家庭における子どもの行動

次節で述べるように母親の態度調査のために母親との個人面接を行なつたが，その際，家庭における子どもの行動について質問し評価を行なつた。詳細については次節で述べることにするがここでとりあげた行動項目は，家庭における依存性と従順性（反抗度）である。*

2　母親の育児態度

〔1〕 面接法による母親の態度調査

標準面接法により面接者が母親と個人的に面接し，その結果を後に評価した。15の場面について，簡単な略画図版を面接の補助として使用した。図版を使用することは，面接者との直接的な緊張を避けるのに役立つたと思う。15の場面は次のようなものである。

1) 子どもが壁にいたずらがきをしている場面
2) 子どもがはだしで家に上つてきた場面
3) 夜ねるとき，そばにいてちようだいといつている場

* 子どもの人気得点については，写真を使用してソシオメトリーを実施したが，その分は本報告においては詳細は省略する。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

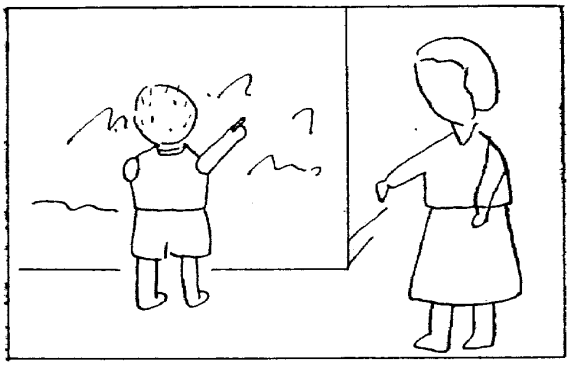
面

4) おしつこをもらした場面
5) 来客とはなしをしているとき裸で入つてきた場面
6) だつこしてちようだいと言つている場面
7) 茶わんをひつくりかえした場面
8) 部屋中いつぱいにちらかして遊んでいる場面
9) 食事のときのこした場面
10) きようだいげんかをしている場面
11) 本をよんでちようだいといつている場面
12) 母親をたたいて，なにか悪口を言つている場面
13) 画いたものを母親にみせに来る場面
14) 洋服をきせてちようだいと言つている場面
15) 母親が外出するとき，つれていつてちようだいと言つている場面
16) 花壇の花を折つた場面
17) 友だちがブランコにのつていて子どもが待つている場面

各場面とも全部母親と子どもとが登場する。質問は「このような場合，お母さんは何とおつしやいますか」「子どもはどうしますか」「このような場面はどのくらいしばしばありますか」という問より成る。

略画図版の例は，Fig. 1 に示すようなものである。

Fig. 1



17場面中 1, 2, 4, 7, 8, 9, 12, の7場面は親の罰の厳しさについて，3, 6, 11, 13, 14, 15の6場面は依存の受容度について評価する。(なおまた，1, 2, 4, 7, 8, 12, 14, の7場面は子どもの従順度について，3, 6, 11, 13, 14, 15, の6場面は子どもの依存度について評価を行なう。)

評価の信頼度　面接は全部のケースについて1名の面接者が行なつたが，評価は全部について2名の評価者が行なつた。各場面2名の評価者の評価についてスピアマンの相関係数をとつたところ，.67～.87であり，相当信頼できると考えられる。

母親の態度の得点　罰の厳しさをみることができると想定した項目および，依存の受容度をみることができると想定した6項目について，リッカート法に準じ項目分析を行ない，その結果，罰の厳しさは7項目全部合格し依存の受容度は 13, 14 の2場面を削除して4項目とした。そしてそれぞれの総計をT得点に換算し罰の厳しさおよび受容度の得点とした。

〔2〕 質問紙による母親の態度

母親の態度を測定するための質問紙を作成して実施した。この態度尺度は次の5つの下位群より成つている。それは次のとおりである。x……一般的社会的態度，y_1……育児意見，y_2……育児の実際，z……祖父母の親に対してとつた態度，e……養育者としての適応度，各項目は Positive-Negative,（肯定的—否定的）active-passive（積極的—受動的）の2つの軸を考えて構成してあり，結果はP－N点とa－p点の2種の得点によつてあらわされる。Positive-Negative は対象に対して肯定的な態度か否定的な態度かをみるものである。active-passive は，対象に対して積極的に働きかけるか，消極的で受身であるかをみるものである*。原案は72問より構成されていたがリッカート法により項目分析の結果，6問をはぶいて66問となつた。残つた項目についての質問紙は次の例に示すようなものである。

1. どんなに苦しくても，自分の好きな仕事をして一生を過ごせればそれが一番幸福だと思います。x（一般的社会的態度）P_p（肯定的受動的）

5. わたしは子どもをなるべくひとりでねかせるようにし，子どもがわたしを呼んでも，「もうおやすみなさい」というだけで傍へ行きません。y_2(育児の実際) N_p（否定的受動的）

20 体をたたいてしつけるのもよいことです。y_1（育児意見）N_a（否定的積極的）

28 わたしの母は，結果のよしあしにかかわらず，努力することをほめてくれました。z（祖父母の親に対してとつた態度）P_a（肯定的積極的）

いまx(一般的社会的態度)，y_1(育児意見)，y_2（育児実際），x(祖父母の親に対してとつた態度）の各領域について，N－P，a－p の相関をとつてみると，x，y_1については相関関係は認められず，y_2ではごく小さな相関が認められるにとどまる。(－.204) そこでN－P，a－pの2種の得点をとることは意味をもつことになる。

次に各領域相互の相関関係をN－P，a－pそれぞれに

* 個体の外界に対する構えを，この2つの直交軸によつてつくられる面のいずれかに属するものと考えた。この考えは Chance, E. (5)によつて述べられている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ついてみると，Table 3 のようになる。

Tabla 3 母親の態度各領域相互の関係
($n=132$)

N−P \ a−p	x	y_1	y_2	z
x		.07	.01	.09
y_1	.12		.25*	.08
y_2	.24*	.44**		.12
z	.09	.18	.19	

* 5%で有意　** 1%で有意

x…一般的社会的態度　y_1…育児意見

y_2…育児の実際　z…祖父母の親に対してとつた態度

Table 3 にみるように，y_1（育児意見）とy_2（育児の実際）の間にはN—P，a—p両者ともある程度の相関が認められるので，以下y_1とy_2とは両者を合計して質問紙による育児態度の得点とする。

面接と質問紙による育児態度の得点の関係

面接による親の態度と質問紙による親の態度の得点相互の関係は Table 4 に示すとおりである。

Table 4 面接，質問紙による親の育児態度得点の相関

		面接		質問紙	
		罰	受容	P—N	a—p
面接	罰				
	受容	−.11			
質問紙	P—N	−.03	.18		
	a—p	.22	−.03		

Table 4 にみるように，面接法と質問紙法との間にはほとんど相関は認められない。質問紙という自己評価による結果と，面接資料をもとにする客観評価の結果とがある程度くい違うのは当然ともいえる。しかし，質問紙面接とも極端な結果を示すものについてみると結果が一致するものが多くみられる。

3 ドルプレイ

以上に述べた方法はいずれも orert な行動をとらえることを意図したものであつた。さらにドルプレイによつて日常行動ではあらわれないものをとらえようと試み，最初はドルプレイによつて親子関係をも観察しようとした。しかし実際には子どもが親に対する態度は必ずしもあらわれず，fantasy を誘発しやすい実験場面における子どもの反応の個人差をみることができたという点で意義をもつものとなつた。ドルプレイ実施の方法は次のとおりである。

1) 実験者とドルプレイの実施

ドルプレイは幼稚園の園庭内の実験室で実施された。子どもは実験者に伴なわれて個人的に実験室でドルプレイを行なう。誘導はたいがいクラス担任教師が行なつた。実験者は男子2名，女子2名があたり，男女児がそれぞれ均等に組み合わされるように割りふつた。試行は2回で，第1，第2の試行間隔は5日から8日であつた。1回の施行時間は20分である。

2) 実験室と遊具

実験室の左隅に観察室があり，中央のテーブルにドルハウスがおかれた。ドルハウスは木製で間仕切りのあるだけの抽象的な構造のものである。人形は身長約15センチのぬいぐるみで，父母，兄弟姉妹，祖父祖母等，実際の家族構成に忠実に用いた。また家具としては積木を使用した。

3) ドルプレイ手順

実験者と被験児は遊具の前に坐り，実験者が父母子どもの順で人形を幼児に手渡した。そして各人形を父母兄自分等と確認させた後，好きなように遊んでよいむねの指示を与えた。そして実験者は友好的な寛容な態度をとつて，幼児が言語，感情を自由に表出できるように注意した。しかし直接的指示を与えたり，遊びにいつしよに加わるようなことは避けた。幼児が脱線行為を示した場合や，興味を失つたと思われた場合には「みんなこれから何するの，今度は何がおこるの」等の質問で幼児の注意を人形にひきもどすように努力を払つた。

4) 記録

ドルプレイ中の行動記録は，観察窓の内側から行ない，カテゴリーをあらかじめ定めて，該当する行動を記録した。カテゴリーは，攻撃，否定的感情，傍観，操作，依存，愛情であり，できるだけ言語および行動を記録するようにした。ひとつの行動のまとまりをひとつの単位として，(イ) 人形 (ロ) 遊具・積木 (ハ) 被験児自身の行動等の変化を一事象として，同一行動が継続した場合30秒ごとに一事象を加算し20分間の各カテゴリーごとの頻数を記録した。行動の頻数分布は正規型でなかつたので，平方根で修正値を求めた。

Ⅳ 結　果

1 子どもの行動の検討 子どもの行動の得点を性別に示すと Table 5 のとおりである。表中，依存母親は面接資料で，他は行動観察資料である。

この表から次の点が指摘される。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

(1) 男児に攻撃が大である。
(2) 男児に従属が大である。
(3) 女児に愛情が大である。
(4) 母親および教師に対する依存は女児に大である。

以上の結果は Sears, R. R. らの従来の諸研究と同一の方向である。

次に子どもの各行動間の相関をとると，Table 6 に示すとおりである。

この表から次の諸点を指摘することができる。

(5) 攻撃，非協力，優位性，活動量の間には，高くはないが有意な相関関係がある。
(6) 優位性は愛情と正の相関がある。
(7) 母親に対する依存は非協力性と正の相関がある。
(8) 人気得点は優位性および愛情と正の相関がある。

Table 5 子どもの行動の得点 $n=71$

		攻撃	非協力	優位	エネルギー	従属	愛情	人気	依存 教師	依存 母親
男児 $n=36$	M	6.74	6.19	24.55	254.6 256.1	15.32	2.99	3.86	5.70	48.27
	SD	4.3	3.7	12.0	15.0 13.7	7.8	2.4	2.6	4.1	6.2
女児 $n=35$	M	3.72	6.18	22.27	232.3 220.6	11.31	4.37	4.04	7.70	50.97
	SD	3.5	4.3	16.7	17.1 11.0	6.5	4.5	2.6	5.1	5.2
男女差の有意性		P<.01	n.s.	n.s.	n.s.	P<.05	P<.10	n.s.	P<.10	P<.05

（エネルギーが2行になつているのは，この点だけクラス差があつたので別個に示したからである）

Table 6 子どもの行動の得点相互の相関 $n=71$

	攻撃	非協力	優位	エネルギー	従属	愛情	依存
攻撃							
非協力	.24*						
優位	.34**	.38**					
エネルギー	.20	.42**	.55**				
従属	−.05	.05	−.13	−.20			
愛情	−.06	.22	.27*	.08	.16		
依存	−.03	.29*	.03	−.04	.05	.23	
人気	.22	.20	.25*	.07	.11	.27*	.05

* 5%水準で有意　** 1%水準で有意

2. 母親の態度

母親の子どもに対する態度を性別に示すと Table 7 のとおりである。

Table 7 母親の態度の得点

	罰		受容	
	男 $n=36$	女 $n=35$	男 $n=36$	女 $n=35$
M	51.6	48.7	48.8	49.4
SD	5.8	5.2	5.7	7.6
男・女	2.9	<.05	−.06	n.s.

この表から次の点が指摘される。

(1) 母親は男児に対して罰がより厳しい。
(2) 受容については性差は認められない。

3. 子どもの行動と親の態度との関係

子どもの行動と親の態度との相関係数をとると，Table 8 および Table 9 のとおりである。Table 8 は面接による親の態度，すなわち罰の厳しさと受容とについて，子どもの行動変数との相関をみたものであり，Table 9 は質問紙による親の態度との関係をみたものである。

Table 8 親の態度（面接）と子どもの行動の相関 $n=69$

親＼子ども	攻撃男	攻撃女	従属	愛情	人気	依存
罰	.39**	.09	.21	−.12	−.01	.02
受容	−.16	.01	.05	.09	.26*	.05

* 5%水準で有意　** 1%水準で有意

Table 9 親の態度（質問紙）と子どもの行動の相関 $n=69$

親＼子ども	攻撃男	攻撃女	従属	愛情	人気
Positive-Negative	.15	−.05	.14	−.03	.08
active-passive	−.14	.20	−.17	−.07	.00

この表から指摘されるのは次の点である。

(1) 男児については，罰が大であると攻撃性は大である
(2) 受容度が大であると人気が大である。
(3) 罰が大であると従属が大になる傾向がある。
(4) 男児は受容が大だと攻撃が小になる傾向がある。
(5) 男児は親が Positive（肯定的）な場合に攻撃が大になり，女児は親が Negative(否定的）な場合に攻撃が大になる傾向がある。
(6) 男児は親が passive（受動的）な場合に攻撃が大になり，女児は親が active（積極的）な場合に攻撃が大になる傾向がある。

親の態度と子どもの行動との間にはあまり大きな相関

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

関係が認められないようにみえる。しかし次章で述べるように，さらに詳細に検討するとなおいろいろの関係をみることができる。

4. ドルプレイ

ドルプレイにおける幼児の攻撃的行動と活動量とについて，1) 試行回数 2) 実験者の性 3) 被験児の性の3要因について，Lindquist の第3型分析法を適用して分散分析を試みた。その結果は Table 10 および Table 11 のとおりである。また各行動の平均頻数を示したものが Table 12a および Table 12b である。

Table 10
ドルプレイ事態における攻撃的行動の分散分析結果
試行，実験者の性，被験児の性（$n=68$）

	df	MS	F
級間	67		
実験者の性	1	13.91	3.86*
被験者の性	1	18.45	5.12
実験者の性×被験者の性	1	0.31	—
誤差	64	3.61	
級内			
試行	1	14.98	17.06***
試行×実験者の性	1	3.80	4.33**
試行×被験者の性	1	0.05	—
試行×実験者の性×被験者の性	1	2.51	2.86*
誤差	64	0.88	
	135		

* p<.10 ** p<.05 *** p<.001

Table 11
ドルプレイ事態における活動量の分散分析結果
試行，実験者の性，被験児の性（$n=68$）

	df	MS	F
級間	67		
実験者の性	1	0.41	—
被験者の性	1	3.37	1.18
実験者の性×被験者の性	1	1.26	—
誤差	64	2.86	
級内			
試行	1	.69	—
試行×実験者の性	1	.12	—
試行×被験者の性	1	.72	—
試行×実験者の性×被験者の性	1	.08	—
誤差	64	1.04	
	135		

Table 12a ドルプレイにおける攻撃的行動

攻撃的行動平均頻数（$\sqrt{x}$）
男児＝34 女児＝34

		第1試行	第2試行
男児	男性実験者	1.69	2.40
	女性実験者	1.23	1.77
女児	男性実験者	0.76	2.05
	女性実験者	0.61	0.72

Table 12b ドルプレイにおける傍観的行動

傍観量平均頻数（$\sqrt{x}$）
男児＝34 女児＝34

		第1試行	第2試行
男児	男性実験者	2.30	2.19
	女性実験者	2.11	2.22
女児	男性実験者	1.89	1.59
	女性実験者	2.18	1.90

これらの表から次の点を指摘することができる。

(1) 第2試行において攻撃性は増加する。

(2) 男児の方が攻撃性は大である。

(3) 男性実験者の場合に女性実験者の場合よりも男女ともより攻撃的である。

(4) 第2試行における攻撃性の増大の度も男子実験者の場合により大きい。

(5) 男児が男性実験者で第2試行において攻撃性は最大で，女児が女性実験者で第1試行において攻撃性は最小である。

(6) 傍観量（逆にいえば活動量を示す）は，試行回数，実験者の性とは無関係である。

(7) 男児の方が女児よりも傍観量が多い傾向がある。

親の態度とドルプレイとの関係は Table 13 に示すとおりである。ここでみるように，

(8) ドルプレイにおける行動は，親の態度と統計的に有意ではないが，母親の受容度が小である場合子どもの攻撃性は高くなり，母親の罰が大であるとドルプレイにおける傍観が減少する傾向が認められる。

Table 13 ドルプレイと親の態度との関係

親＼子ども	攻撃	傍観	消極的感情
罰	.07	−.20	−.05
受容	−.21	−.10	−.05

V 考察 (1) 攻撃と依存

以上で結果の概略の説明を終り，以下に上の結果をもとにして各行動変数についてより詳細に分析し，その規定条件について考察する。

1 攻撃性

攻撃性は人を傷つける行動傾向である。次に攻撃性を規定する親の態度について結果をさらに分析し，考察する。以下に幼児の攻撃性と母親の態度との関係について本研究の結果から示される諸点を列挙する。

(1) 親が子どもにフラストレーションを多く与える場合，すなわち罰が厳しい場合，子どもの攻撃的傾向は大となる。

このことは，Frustration-Aggression Theory によつ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

て示唆されるものであり，Table 8 にみることができる。Table 8 では，男児の場合に親の罰が厳しいと子どもの攻撃性が大となる。

(2) 男児の場合，罰が厳しくなくとも攻撃が大なるものがかなりみられるが，女児の場合は，罰が厳しくないと攻撃性はほとんどあらわれない。

このことは Table 14a と Table 14b にみることができる。これは男児の場合には母親の罰の厳しさ以外の要因が働いて，男児の攻撃性を大きくしていると考えることができる。その要因として，攻撃が男性の役割として社会に承認されていることを挙げることができる。したがつて罰が小であつても男児が攻撃性を示すことが多い。

Table 14a 罰の厳しさと攻撃性 女児の場合

攻撃＼罰	大	小	計
大	9	3	12
小	7	15	22
計	16	18	34

Table 14b 罰の厳しさと攻撃性 男児の場合

攻撃＼罰	大	小	計
大	14	6	20
小	8	7	15
計	22	13	35

(3) 女児の場合，罰が厳しいと攻撃性は逆に小になるものが多くみられる。

このことは Table 8 で女児に罰の厳しさと攻撃性との間に相関関係が認められないこと，および Table 14a において，罰が大であつて攻撃が小になる例が約半数 (7/16) あることによつて傾向を見ることができる。この点は，Sears, R. R. (1953) の結果はより明瞭な傾向を示しており，罰の大きさと攻撃性との間の相関は女児において，−.41，男児において .60 である。われわれの資料はこれほど明瞭ではないが同方向の傾向を示すものといえよう。

この理由として，女児の場合に母親とより強く同一化していることを考えることができる。母親とより強く同一化する場合には，母親の罰に対してより敏感となり，母親の罰はより強く抑制としてはたらくであろう。

(4) 罰が厳しいために攻撃性が小になつているものはドルプレイの空想場面でより攻撃的でより活動的になる傾向がある。

男児の場合，罰が厳しくて攻撃が小なるものは8名であるが (Table 14b)，ドルプレイの結果をみると，8名中5名はドルプレイにおける攻撃は大である。それに対して罰が小さくて攻撃も小なるもの7名についてみるとドルプレイで攻撃を表出しているものは1名にすぎない。

女児の場合，罰が大で攻撃が小なるもの7名についてドルプレイの結果をみると，攻撃性を示すものは2名にすぎないが，1名を除いては全部ドルプレイにおける活動は大である。すなわち空想場面では活発に活動しているということができる。以上のことは，罰のフラストレーションによる攻撃が表面にあらわれない場合も，空想のレベルでの活動が大きくなることを示すものである。

(5) 母親の罰が厳しいために，家庭で攻撃性をあらわさない場合には，幼稚園およびドルプレイにおける攻撃性が大となるであろう。また親が寛容の場合，家庭で攻撃的でないものは幼稚園やドルプレイでも攻撃的でないであろう。

家庭における攻撃性の測定値として，家庭における従順—反抗度をとり，家庭での攻撃の大なるものと小なるものとにわけることにした。そして家庭と幼稚園とドルプレイにおける攻撃性の変化を示したのが Table 15 である。

Table 15 家庭，幼稚園，ドルプレイにおける攻撃性の変化と育児態度との関係

攻撃＼育児態度			厳格			寛容			合計
家庭	幼稚園	ドルプレイ	男	女	計	男	女	計	
小	大	大	2	1	3	1	0	1	4
小	大	小	2	1	3	0	2	2	5
小	小	大	0	1	1	1	3	4	5
小	小	小	0	0	0	1	0	1	1
計			4	3	7	3	5	8	15

まず顕著なことは，親が厳格で家庭で攻撃性を出さない場合，女児1名を除いて全部(6/7) 幼稚園で攻撃的である。それに対して親が寛容の場合，家庭で攻撃的でないもの8名の中の5名までが幼稚園でも攻撃的でない。また寛容の場合，たとえ家庭で攻撃性を出してもその大部分は幼稚園では攻撃性を出さない。すなわち，親が厳格な場合には家庭では攻撃性があらわれなくて幼稚園やドルプレイで攻撃的になる傾向があり，親が寛容な場合には家庭で攻撃性があらわれる場合があるが幼稚園やドルプレイでは攻撃性はあらわれない。親が厳格な場合には，家庭で攻撃性を表出することには不安が伴ないやすく，したがつて家庭では攻撃性があらわれないと考えられよう。その不安は幼稚園，ドルプレイとしだいに減少するから，そのときには攻撃性が大きくなると考えられる。それに対して親が寛容の場合には家庭で攻撃性を表出することに対する不安はなく，したがつて攻撃的になる場合があるが，幼稚園やドルプレイでは攻撃性を表出する必要はないのである。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

(6) 他の行動変数と攻撃性との関係をみた場合，2つの場合がみられる。第1は，攻撃性が大であつて従順性および愛情の得点が大なる場合であり，第2は攻撃性が大であつて従順性および愛情の得点が小なる場合である。

前者は攻撃的であつても協力的で，元気のよいものであり，後者は攻撃的で反抗的ないわば冷い aggressor である。親の態度との関連をみると，前者は親は厳格であつても，受容的であり肯定的である。それに対して後者は親は厳格で拒否的で受容度が小である。このことはⅣの Table 22 および Table 23 にみることができる。

(7) 母親は男児に対してより厳格である。

このことは Table 7 にみることができる。従来精神分析学的観点よりいわれてきたことは母親は同性の子どもに対してより厳格になり，男児に対してはより寛容になるだろうということであつた。われわれの資料ではこの点は確認されないで，むしろ逆の結果であつた。男児の攻撃性がむしろ刺激となつて母親の攻撃が誘発され母親はより厳格な態度になるのであろうか。あるいは母親は男児に対してより厳格になる心理機制が考えられるのであろうか。その点はここでは明確にすることはできない。

(8) 攻撃は男児に大であり，女児に小である。

この点はTable 5 にみるように，自由遊びにおける行動についても，Table 10 にみるようにドルプレイについても一貫して明瞭に認めることができる。このことは以上にすでに述べた3つの要因と関係があると考えられる。第1は男児に対しては社会的に攻撃が承認されていること，第2は男児に対して母親がより厳格であること第3には男児は父親に対してより同一化し，父親はより攻撃的であることである。

(9) ドルプレイにおいて，男性実験者は女性実験者よりも攻撃性をより多く誘発し，第2試行における攻撃性の増大も男性実験者の場合により大である。このことは男児についても女児についても該当する。(Table 10)

解釈として男性は攻撃性に対してより許容的であると認知されるので，男性の実験者の場合に攻撃性は大きくなると考えることができる。

以上の結果を総合して，上の結果に考察された攻撃性の規定要因として次の5つを挙げることができる。

1) 社会的要因　社会的規準が男児に攻撃性を許容すると考え，攻撃は男性の役割であると考える。(2, 7, 8, 9)

2) フラストレーション・アグレッションの要因　フラストレーションはアグレッションを生む。したがつて親がフラストレーションを多く加える場合，すなわち親の罰が厳しい場合に攻撃は大となる。(1, 6)

3) 同一化の要因　攻撃者と同一化される場合，攻撃は大となる。男性は一般により攻撃的である。(6, 8)

4) 攻撃不安の要因　攻撃することに対して不安のある場合に攻撃的行動は表面にはあらわれない。罰が非常に厳しい場合には攻撃はかえつて小さくなる。また母親と女児との間には攻撃不安が大きく抑制はより強くはたらく。(3, 4, 5, 9)

5) 空想表出の要因　現実場面で抑制された攻撃は空想場面，すなわちドルプレイで空想攻撃としてあらわれる。(4, 5)

2 依存性

依存は他人の助力や承認を求め，身体的接触や近接を求める行動である。以下に依存性を規定する親の態度について本研究の結果を分析し考察する。

親に対する依存と親の罰および受容について相関をとつても Table 8 にみるように全体としては有意な相関はないようにみえる。これは依存性の中に，親が拒否的なために依存性が大になるものと，受容的なために依存性が大になるものとが混入し，またその他の要因も混入しているためと思われる。津守・稲毛 (1960) の依存性に関する研究においても，全体としては依存性と親の態度との間には相関は認められないようにみえるにもかかわらず，上の2種の依存性を分析することができたのである。ここではまず各種の場面における依存性の比較を試みる。

(1) 家庭でも集団場面でも依存性が大なるものは母親が negative なものが多く，家庭で依存性が大であつても集団場面で依存性が小なるものは，母親が受容的で positive なものが多い。

前述したように，われわれの資料においては，子どもに対する依存性は信頼度が低いために整理からはぶいたのであるが，その他に3種の依存性の得点がある。すなわち，幼稚園における教師に対する依存（行動観察による），家庭における母親に対する依存（母親との面接による），ドルプレイにおける実験者に対する依存（ドル

Table 16
母親，教師，ドルプレイ実験者に対する依存相互の相関関係

	母親に対する依存	教師に対する依存	ドルプレイ実験者に対する依存
母親に対する依存			
教師に対する依存	−.13		
ドルプレイ実験者に対する依存	−.14	.20	

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

プレイ中の行動観察）である。この3者の相互関係は Table 16 に示すとおり，ほとんど相互関係は認められない。性差についてプロットしてみたが，顕著な性差は認められなかつた。

この3種の事態はかなり異なつた事態であることは容易に考えられる。家庭における母親と子どもとの依存関係は，生れたときから生育史の中でつくられてゆく関係である。幼稚園における教師との関係は，この母子関係の地盤の上につくられるものであつて，ある場合には母親との関係がそのままにもちこされるかもしれないし，ある場合には全然逆になることも考えられる。家庭において母親が拒否的であつてそのために依存の欲求がみたされず，幼稚園において教師に対して一層依存的になる場合もあろうし，また家庭において母親との愛情関係を保ち，依存関係をつくつていて，家庭で依存の欲求がみたされている場合に幼稚園では教師に対して依存しない場合もあるだろう。またドルプレイ場面は子どもにとつて新しい緊張場面であるので，特殊な場面を形づくつている。この3種の依存得点が相関をもたなくても当然といえよう。以下特にことわらない場合には，家庭における母親に対する依存性を中心に考えてゆくことにする。

Table 17
家庭と幼稚園における依存性と親の態度

依存性 / 親の態度	家庭で大 ♀	幼稚園で大 ♂	家庭で大 ♀	幼稚園で小 ♂	家庭で小 ♀	幼稚園で大 ♂	家庭で小 ♀	幼稚園で小 ♂	
否定的	7	5(12)	4	3(7)	5	5(10)	1	5(6)	35
肯定的	4	1(5)	6	7(13)	5	5(10)	4	3(7)	35
	11	6	10	10	10	10	5	8	70

（　）内は男女の計を示す

家庭における依存性と幼稚園における依存性とを，親の態度との関連において示すと，Table 17 のようになる。顕著なことは，家庭で依存性が大であつて幼稚園でも依存性が大なるものは，母親の態度が否定的なものが多く，家庭での依存性が大であつても幼稚園で依存性が小なるものは，母親が肯定的なものが多い。これは何を意味するかというと，母親が拒否的なために依存の欲求がみたされず家庭において依存的になつているものは幼稚園でも教師に対して依存的になり，母親が肯定的な態度で，子どもとの愛情関係が成立していて依存的になつている場合には幼稚園にきたときには，教師に対しては依存的にならないということができよう。すなわち，後者の方が安定しているということができる。顕著な性差は認められない。

(2) 男児は罰が大だと依存は小となり，女児は罰が大だと依存は大である。受容度についても同方向の結果である。

いま，性別に罰の厳しさと依存度との関係をみると Table 18 のようになる。

Table 18a は依存度小なるものについて，親の罰の厳しいものとそうでないものとの2群にわけた結果である。すなわち，男児は，罰が大なるものに依存が小なるものが多く，女児は罰が小さい方が依存が小になる傾向にある。これは，男児の場合には母親が罰が厳しい場合依存の対象を母親に求めず，むしろ母から離れてゆき，父親との関係を結びやすく，女児の場合には母との関係をより一層強くもとうとする傾向により，母の罰が厳しいと，より依存的になるのであると考えられる。

Table 18a
依存度小なるものと罰との関係

	罰小	罰大	計
男	6	13	19
女	9	5	14
計	15	18	33

Table 18b
罰が大なるものと依存との関係

	依存大	依存小	計
男	9	13	22
女	11	5	16
計	20	18	38

このことは受容度との関係にもあてはまる。すなわち Table 19 にみるように，男児の場合には，受容度小なる場合には依存が小になるものが多いのに対して，女児の場合には受容度が大である場合に依存は小である。

Table 19
依存度小なるものと受容との関係

	受容小	受容大	計
男	8	6	14
女	4	7	11
計	12	13	25

女児の方が母親とよりよく同一化しているとすれば女児は母親の罰に対して敏感であるはずである。そうならば，同じ罰でも女児はより強く感じるだろう。そしてもともと母親を求める欲求は女子に強いから，依存性は一層大となる。ただし罰が極度に厳しくなれば Sears のいうように，依存度はもつと減少すると考えてよいであろう。

(3) 親が否定的で罰が大であるものの極端なものをとると依存性は小となり，肯定的で罰が小の極端なものを

Table 20 親の態度の極端なものと依存との関係

	Na または Np で罰大受容小のもの		Pp または Pa で罰小受容大のもの		計
	依存大	依存小	依存大	依存小	
男	2	5	2	3	12
女	1	4	4	2	11
計	3	9	6	5	23

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

とると依存は大となる。

母親が典型的に拒否的なタイプのもの，すなわち，罰大，受容度小で Na または Np のものと，典型的に受容的なもの，すなわち，罰小，受容大で，Pp または Pa のものについて，依存度の大小を比較してみると Table 20 のとおりである。

親の態度については，このように典型的なものをとると，親が拒否的なものは依存度が小になる。これは，dependency anxiety により，依存性が抑制されるからと考えられる。これに対し親が肯定的で受容的で依存度が大になるものは，過保護によるケースと考えることができよう。

(4) 依存が大で攻撃性が大なものは，罰が厳しいものが多い。

これは Table 24 にみることができる。罰が厳しくて依存が大になるもの，すなわち依存不安 (dependency anxiety) が大になると，そのコンフリクトにより攻撃は大になると考えることができよう。

(5) 依存は女児に大である。

このことは Table 5 にみることができる。その解釈として，第1は女児は母親との同一化が大であるから，母親の罰に対して敏感であり，母親からより多くフラストレーションを感ずる。その結果，女児は否定的依存になる可能性が多いといえる。第2は，女児に対して依存は社会的に承認された行動である。攻撃性が男児に承認された行動であつたように依存は女児の役割りとして認められた行動であるとすれば，依存は女児に大になるといえる。

以上の結果を総合して，上の結果に考察された依存性の規定要因として次の3つを挙げることができる。

1) 依存が許容され，依存が強化されると依存は大となる。(3)

2) 依存が拒否される場合，フラストレーションにより依存欲求が大となる。(1, 2, 4) この場合，女児の方が依存欲求のフラストレーションに対して一層敏感である。

3) 社会的要因として依存が承認される場合，依存は大となる。(5)

攻撃と依存以外の行動変数については，次の章で考察する。

Ⅵ 考察 (2) 行動類型

1. 子どもの行動類型の分類

子どもの行動変数をひとつずつ別々に検討するのみでなく，行動相互の結びつきを考えて，それぞれの子どもの行動型をつくつてみることができる。いま，Table 6 に子どもの行動の相関係数が記してあるが，これを見て明らかなことは，最初の4つの行動，すなわち，攻撃，非協力性，優位性，エネルギーが，相互にある程度の相関を示し，従属と愛情とは他の行動より比較的独立していることである。そこで各行動を上に述べた順序に並べて，それに面接調査による依存性と従順性ソシオメトリーによる人気得点とを加えて，それぞれを得点化したものによつて個人別にプロファイルをつくつた。このプロファイルを相互に比較し，似たものを集めて，プロファイルの形のうえから次のとおりの型をつくることができた。

各行動類型にふくまれる人数は Table 21 に示すとおりである。

A_1 攻撃，非協力，優位，エネルギー，従属，愛情のいずれも得点の高いもの。

A_2 攻撃，非協力，優位，エネルギーの得点は高く，従属，愛情は得点の低いもの。

A_3 攻撃は大きいが，非協力，優位，エネルギーは得点が低くなり，従属，愛情は概して高く，幼稚園における依存が高いもの。

B_1 全体的にいずれも得点の低いもの。

B_2 攻撃，非協力，優位は得点が低く，従属，愛情は得点が高いもの。

C_1 全体的にだいたい平均的な得点のもの。

C_2 全体的にだいたい平均であるが，優位またはエネルギーで得点の低くなつているもの。

D いずれの形にも入らないもの。

このような形のうえでの分類がどの程度妥当性をもつものであろうか。その点をたしかめるために，それぞれの子どもについて，担任の教師に，その子どもの幼稚園における概況を約4分間話してもらい，シンクロファックスを用いて記録し，後にそれぞれの子どもについてプロファイルと比較して検討した。教師はいずれも優秀な教師であり，この子どもたちを1年以上担任していて，子どもについてよく知つている。検討した結果，Tで50前後のものを多少移動させた方がよいと思われるものが数人でてきたが，全般的にみて，教師の報告とプロファイルとはきわめてよく一致していた。なおさらに，A_1 から C_2 までの7種の分類について，そこに集められたものに共通の特徴を教師に話してもらつたところ，グループとしての特徴も，すでに述べたところとよく一致する。

以上のことから，この類型によつて子どもの overt な行動を，かなり適切にとらえることができたということ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ができよう。次にこの類型が親の態度と，またドルプレイにあらわれる fantasy といわれる行動とどのような関連に立つかを検討せねばならない。

Table 21 各行動類型に含まれる人数

	A_1	A_2	A_2	B_1	B_2	C_1	C_2	D	計
男	7	8	2	4	3	4	6	2	36
女	5	4	4	4	5	3	4	5	34
計	12	12	6	8	8	7	10	7	70

2 行動類型と親の態度

親の態度

親の態度を標記するのに，質問紙資料から，P−N 系列において，中位数で2分し， Positive（肯定的）と Negative（否定的）な態度とし，前者をP，後者をNで標記する。また a−p 系列も中位数で2分し，active（積極的）と passive（受動的）な態度とし，前者を a，後者を p で標記する。さらにまた，上位，下位，それぞれ約10名ずつをとり出して，そのように極端な価を示すために，Ⓟ，Ⓝ，ⓐ，ⓟと標記することにする。また面接資料においては，罰の厳しさについて，中位数で2分して，罰の厳しいものを厳，罰の厳しさの小さいものを寛とする。また受容度についても中位数で2分して受容度大なるものを大，小なるものを小とする。そして上位，下位約10名ずつを厳，寛，㊣，㊦，として標記する。そして，以上4種の得点を並べて標記するにはいまのべた順序で，すなわち P−N，a−p，厳—寛，大—小，の順に記すことにする。たとえば，Pp 寛大であれば，母親は Positive，passive な態度で，寛容であり受容度は大きい。また Na 厳小であれば，Negative，active で罰は厳しく受容度は小である。

行動類型と親の態度とを，類型別に検討してみよう。

A_1 全体的に得点の高いもの（明るくて元気があり，すなおでしつかりしていて，クラスをリードすることも多い。）*

この類型に属するものの親の態度は次の Table 22 に示すとおりである。

ここにみるようにこの類型では，親の態度は Positive なものが多い。またやや passitve なものが多い。罰は厳しいものが多く，受容度は大なるものが多い。性差は認められない。すなわち，A_1の類型には，親の態度は，Pp 厳大(Positive, passive, 厳格，受容度大)となる。換言すれば，母親は子どもに対して肯定的な態度であり，受身である。しかし罰は厳しくて，受容度は大である。

*（　　）内は，各行動類型の特徴を教師に記述してもらつた結果である。

Table 22 行動類型 A_1 と親の態度

	人数	P—N		a—p		罰		受容	
		P	N	a	p	厳	寛	大	小
男	7	5③	2②	3	4②	5①	2①	4②	3③
女	5	4①	1	2	3①	3①	2①	4	1①
計	12	9④	3②	5	7③	8②	4②	8②	4④

○印で囲んだ数字は，特に極端な価のものの数を示す。

A_2 攻撃的，非協力的，優位的，活動量が大きく，従順性，愛情の小さいもの。（気が強く反抗的で，活動量も大きく，他人との折り合いがうまくゆかず問題行動も多いもの）

Table 23 行動類型 A_2 と親の態度

	人数	P—N		a—p		罰		受容	
		P	N	a	p	厳	寛	大	小
男	8	4①	4①	3②	5②	5②	3	3	5
女	4	1	3②	2②	2①	2①	2	2①	2
計	12	5①	7③	5④	7③	7③	5	5①	7

○印で囲んだ数字は，特に極端な価のものの数を示す。

Table 23 にみるように，A_2に属するものは，Negative な態度のものが多い。この点はやや性差があり，男児には Positive な態度が多い傾向がある。a−p では，やや passive な傾向があるが顕著でない。罰は厳格なものが多く，受容度はやや小さいものが多い。A_2 の類型では，典型的には親の態度はN厳小（Negative, 罰は厳格，受容度小）となる。換言すれば親は子どもに対して拒否的な態度である。

A_3 攻撃的であるが，活動量は小さく，従順，愛情は大きく，特に依存度が大きいもの。（依頼心が強く頼りない。）

この類型に属するものの親の態度は，Table 24 に示すとおりである。すなわち，親は子どもに対して Positive なものが多く，active である。罰は厳しいものが多い。ただし，この類型に属するものは，平均得点に近いものが多く，その点を考慮すると，上の傾向はあまり明瞭でなくなる。A_3 の類型の親の態度は，典型的には，Pa厳（Positive, active, 罰は厳格）という傾向がある。

Table 24 行動類型 A_3 と親の態度

	人数	P—N		a—p		罰		受容	
		P	N	a	p	厳	寛	大	小
男	2	1	1	1	1	2①	0	1	1①
女	4	3①	1①	3①	1①	2	2	2	2①
計	6	4①	2①	4①	2①	4①	2	3	3②

○印で囲んだ数字は，特に極端な価のものの数を示す。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

B_1 全体的に得点の低いもの。(社交性がなく，ひとりでいることが多い。気がむかないとなにもしない。)

この類型の親の態度は Table 25 に示すとおりである。この類型では，親はやや Negative なものが多い傾向にある。ただしその傾向は男児に強い。また，active なものが多い。そこで典型的には，Na (Negative active) となる。

Table 25 行動類型 B_1 と親の態度

	人数	P—N		a—p		罰		受容	
		P	N	a	p	厳	寛	大	小
男	4	1	3②	2①	2①	1	3①	2	2
女	4	2	1	3①	0	3	1	3	1
計	8	3	4②	5②	2①	4	4①	5	3

○印で囲んだ数字は，特に極端な価のものの数を示す。

B_2 攻撃的でなく，活動的でないが，従順性と愛情は高いもの。(積極性はないが，おとなしくて気持がやさしいもの。)

この類型は親の態度がもつともはつきりとした傾向の認められるものである。Positive な態度で，passive な態度である。罰は厳しくなく，受容度は大である。典型的には，Pp 寛大 (Positive, passive, 寛容，受容度大) である。なおこの類型でもうひとつ顕著なことは，極端な価がきわめて少なく，中庸的な価で，しかもはつきりと，上にのべた方向を示していることである。

Table 26 行動類型 B_2 と親の態度

	人数	N—P		a—p		罰		受容	
		P	N	a	p	厳	寛	大	小
男	3	3	0	0	3	2	1	2	1
女	5	4①	1	2	3①	1	4	4	1
計	8	7①	1	2	6①	3	5	6	2

○印で囲んだ数字は，特に極端な価のものの数を示す。

C_1 全体に平均的なもの。(表面にはあらわれないが，内面的に特長のあるものが多い。)この類型はプロファイルの上からは平凡であるが，内面的に個性があることが著しい特徴である。親の態度としては種々あるが，共通の点は受容度が大であることである。

Table 27 行動類型 C_1 と親の態度

	人数	P—N		a—p		罰		受容	
		P	N	a	p	厳	寛	大	小
男	4	3	1	2①	2①	3	1①	4	0
女	3	1①	2①	2①	1	1	2①	3②	0
計	7	4①	3①	4②	3①	4	3②	7②	0

○印で囲んだ数字は，特に極端な価のものの数を示す。

C_2 全体的にだいたい平均であるが活動量または優位性で低くなるもの。(おとなしくて目立たない，型にはまりやすいところがある。)

この類型の親の態度は，Table 28 のとおりである。ここにみるように，Negative な態度が多く，また，active な態度が多い。すなわち，典型的には，Negative active な態度であり，子どもに対して拒否的であり，積極的になにかさせようという気持が強い。

Table 28 行動類型 C_2 と親の態度

	人数	P—N		a—p		罰		受容	
		P	N	a	p	厳	寛	大	小
男	6	3	3	4	2①	3①	2①	2①	3①
女	4	0	4①	3①	1	1	3	3	1①
計	10	3	7①	7①	3①	4①	5①	5①	4②

○印で囲んだ数字は，特に極端な価のものの数を示す。

D 形のうえでどれにも入らない。(勝手で従順でなく，ときに乱暴でむらがある。)この類型の親の態度は，Table 29 に示すとおりである。子どもに対して積極的になにかをさせようとする態度と，受容度が大きい点が特徴的である。またこの類型には Pa (Positive, active) のものが多く含まれている。

Table 29 行動類型Dと親の態度

	人数	P—N		a—p		罰		受容	
		P	N	a	p	厳	寛	大	小
男	2	1①	1	1	1	1	1	2①	0
女	5	3	2	4①	1	3	2	4①	1
計	7	4①	3	5①	2	4	3	6②	1

○印で囲んだ数字は，特に極端な価のものの数を示す。

3 行動類型とドルプレイ

(1) 行動類型とドルプレイにおける活動量

ドルプレイにおける observation の量をもつて，ドルプレイにおける活動量を示す指数といちおう考えることができる。そうすると，ドルプレイにおいて，じつとみているだけでなにもしないという行動の量 (observation) が大きいということは活動量が小さいことを意味し，その量が小さいことは活動量が大きいことを意味する。行動観察における活動量はたんなる運動量だけでなく，精神的活動量をもふくめたものである。そこで，いま，それぞれの変数を，中位数で2分して，各行動類型別に集計すると，Table 30 のようになる。

まず，行動観察で活動量が大きいもので，ドルプレイでもよく活動するものは，A_1 と A_2 に多いが，A_1 の方は

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ドルプレイで活動量の小さいものが多く，A_2の方は，ドルプレイで活動量が大きくなるものが多い。すなわち，A_2 の方がドルプレイでよく活動しているということになる。この点は，行動観察における活動量の小さいものにもあてはまり，A_2 のグループはたとえふだんの活動量は小さくても，ドルプレイになるとよく動くものが多い。すなわち，A_2 はドルプレイでよく動くものが多く，

Table 30　行動観察とドルプレイにおける活動量の比較

		ドルプレイにおける活動量			
		大		小	
行動観察における活動量	大		%		%
		A_1	9 (21.5)	A_1	10 (31.2)
		A_2	11 (26.2)	A_2	4 (12.5)
		A_3	3 (7.2)	A_3	1 (3.1)
		B_1	2 (4.8)	B_1	2 (6.2)
		B_2	3 (7.2)	B_2	1 (3.1)
		C_1	7 (16.7)	C_1	8 (25.0)
		C_2	3 (7.2)	C_2	5 (15.5)
		D	4 (9.6)	D	1 (3.1)
			42		32
	小		%		%
		A_1	3 (10.0)	A_1	2 (5.6)
		A_2	7 (23.4)	A_2	3 (7.9)
		A_3	7 (23.4)	A_3	3 (7.9)
		B_1	7 (23.4)	B_1	5 (13.1)
		B_2	4 (13.3)	B_2	7 (18.4)
		C_1	2 (6.6)	C_1	
		C_2		C_2	10 (26.2)
		D		D	8 (21.0)
			30		38

ドルプレイが家族関係における問題を fantasy として表出することを促すとすれば，A_2 は家庭における問題を多くふくむとみられるグループであるから，その点でドルプレイは fantasy の表出に役立つているといえよう。行動観察では活動量が小さくてドルプレイではよく活動しているものとして，A_3，B_1 をあげることができるがいずれも家庭における問題をふくんでいる可能性の多いものである。それに対して行動観察でもドルプレイでもともに活動量の小さいものは，C_2とDに顕著である。C_2は親の態度としても Na が多く，子どもの発意や自発性が少なく，型にはまりやすいタイプの子どもでありドルプレイ場面においても，実験者の存在が自発的行動の圧力となつていると考えられる。Dのグループも，親の態度としては，Pa が多く，教育熱心な親が多くて，その圧力が影響して，ドルプレイにおける活動を制約しているのではないだろうか。

以上の点から，ドルプレイにおける活動量は，子どもの行動類型および，家庭における親の態度となんらかの関係があるということができよう。

(2)　行動類型とドルプレイにおける攻撃との関係

幼稚園の日常生活の中の overt な行動で，攻撃があらわれるもの，あるいはあらわれないものについて，ドルプレイにおける攻撃のあらわれ方と比較してみる。そして，日常行動観察の中で，overt な攻撃が出ないにもかかわらず，fantasy と考えられるドルプレイの中では攻撃が出るものはどういう類型の子どもであるか，また行動観察では攻撃行動が強いにもかかわらず，ドルプレイでは攻撃があらわれないものはどういう類型の子どもであるか等について検討してみよう。

そのために，行動観察の攻撃を2つにわけ，またドルプレイにおける攻撃を2つにわけて，比較すると Table 31 および Table 32 に示すとおりである。

Table 31　ドルプレイの攻撃と行動観察の攻撃との関連（類型別）

		ドルプレイの攻撃			
		小		大	
行動観察の攻撃	小		%		%
		A_1	3 (7.9)	A_1	1 (5.5)
		A_2	2 (5.2)	A_2	
		A_3	1 (2.6)	A_3	1 (5.5)
		B_1	9 (23.4)	B_1	3 (16.5)
		B_2	8 (20.8)	B_2	7 (38.5)
		C_1	5 (13.0)	C_1	3 (16.5)
		C_2	5 (13.0)	C_2	1 (5.5)
		D	5 (13.0)	D	2 (11.0)
	大		%		%
		A_1	15 (30.0)	A_1	6 (18.5)
		A_2	10 (20.0)	A_2	12 (37.0)
		A_3	5 (10.0)	A_3	6 (18.5)
		B_1	4 (8.0)	B_1	
		B_2		B_2	
		C_1	3 (6.0)	C_1	1 (3.1)
		C_2	10 (20.0)	C_2	4 (12.4)
		D	3 (6.0)	D	3 (9.3)

Table 32　ドルプレイの攻撃と行動観察の攻撃との比較（試行回数別）

		ドルプレイの攻撃				
		小		大		
行動観察の攻撃	小	第1回	22	第1回	7	
		第2回	16	第2回	11	
		計	38	計	18	56
	大	第1回	28	第1回	15	
		第2回	22	第2回	18	
		計	50	計	33	83
			88		51	139

行動観察で攻撃大で，ドルプレイでは攻撃小なるものは，A_1で 30%，A_2で 20%であり，A_1に多いのに対して，行動観察で攻撃大で，ドルプレイでも攻撃大なるものは，A_1で 18.5%，A_2で37.0%で，その関係は逆にな

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

る。A_1の攻撃は，活動量の過剰にもとづくものであり，ドルプレイにおいて家族関係における攻撃を出すような場合には，A_1はそこで攻撃的になる必要がないものであるか，あるいは，ドルプレイ場面で実験者の存在に影響をうけて，攻撃が抑制されたものでないかと考えられる。それに対して，A_2のものは家族関係でも問題が多く，そのことによる攻撃がドルプレイの中で表出されたものと考えることができる。

次に行動観察で攻撃が小さく，ドルプレイでも攻撃が小さいものは，B_1とB_2に多いが，行動観察では攻撃的でないのにドルプレイでは攻撃的になるものはB_2に多いことである。ドルプレイがfantasyを示すものでありふだんは抑制されている攻撃がドルプレイにおいては示されるものであると仮定するならば，B_2のものがなぜそうなるのか，よく説明することは困難である。B_2は親もPositiveでpassiveなものが多く，罰も小で受容度大なるものが多く，fantasyで表現しなければならないような抑制された攻撃を想定することは困難だからである。

非常に一義的な結果とはいいがたいが，ドルプレイにおいて，攻撃をとおして家庭における問題が表出されることをやや示すことができた。

Ⅶ　要　　約

幼児のパーソナリティは，親と子の力動的な相互関係の中で形成される。本研究は，幼児のパーソナリティおよび母親の育児態度を諸種の方法によつて測定し，親の育児態度と幼児のパーソナリティの発達との間にどのような力動的な関係があるかを考察した。

被験者：被験者は4，5才の幼稚園児71名とその母親子どもの知能および家庭の社会経済状態は著しく高い。

方法　1.　幼児のパーソナリティ特性をとらえるために次の方法を用いた。〔1〕自由場面における行動観察タイムサンプリングにより1名につき3分間20回，計60分，観察項目は，攻撃，優位，非協力，従属，依存，愛情，活動量（エネルギー）であり，2名の観察者による一致度，および自己折半による信頼度は十分な信頼性を示しており，教師の評価ともある程度一致している。〔2〕母親との面接により，家庭における依存性と従順性とについて評価した。

2.　母親の育児態度をとらえるために次の方法を用いた。〔1〕面接法，場面について略画図版を使用し，面接後評価をした。評価項目は罰の厳しさと依存の受容度である。〔2〕質問紙，母親の育児態度を測定するための質問紙を作成し，肯定的否定的，積極的受動的の2つの軸を考え，リッカート法によつて項目分析を行なつた。

3.　ドルプレイ　20分2回ずつのドルプレイを実施し子どもの性差を考慮して，男子実験者，女子実験者を組み合わせた。記録のカテゴリーは，攻撃，否定的感情，傍観，操作，依存，愛情である。

結果と考察

Ⅰ　攻撃性の発達と親の態度について，本研究から指摘される点は次の諸点である。

1.　親が子どもにフラストレーションを多く与える場合すなわち，罰が厳しい場合，子どもの攻撃的傾向は大となる。(Table 8)

2.　男児の場合，罰が厳しくなくとも攻撃が大なるものがかなりみられる。(Table 14)

3.　女児の場合，罰が厳しいと攻撃性は逆に小になるものが多くみられる。(Table 8)

4.　罰が厳しいために攻撃性が小になつているものは，ドルプレイの空想場面でより攻撃的でより活動的になる傾向がある。(Table 14)

5.　母親の罰が厳しいために，家庭で攻撃性をあらわさない場合には，幼稚園およびドルプレイにおける攻撃が大になる。(Table 15)

6.　攻撃性が大で，従順性および愛情が大なる場合には親は厳格であつても受容的，肯定的である。それに対して，攻撃が大であつて，従順性および愛情が小なる場合には親は厳格で否定的で受容度小である。(Table 22. 23)

7.　母親は男児に対してより厳格である。(Table 7)

8.　攻撃は男児により大であり，女児により小である。(Table 5. Table 10)

9.　ドルプレイにおいて，男性実験者が女性実験者よりも攻撃性をより多く誘発し，第2試行における攻撃性の増大も男性実験者の場合により大である。(Table 10)

以上の結果を総合して，攻撃性の規定要因として次の諸要因をあげた。

(1)　社会的要因　攻撃は男性の役割として社会が許容する。(2, 7, 8, 9)

(2)　フラストレーション・アグレッションの要因 (1, 6)

(3)　同一化の要因　攻撃者と同一化される場合，攻撃は大となる。(6, 8)

(4)　攻撃不安の要因　攻撃することに対して不安のある場合には攻撃は抑制される。(3, 4, 5, 9)

(5)　空想表出の要因　現実場面で抑制された攻撃は空想場面で表出される。(4, 5)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Ⅱ　依存性の発達と親の態度について本研究から指摘される点は次の諸点である。

1.　家庭でも集団場面でも依存性が大なるものは母親が否定的なものが多く，家庭で依存性が大であつても，集団場面で依存性が小なるものは，母親が受容的で肯定的なものが多い。（Tabl 17）

2.　男児は罰が大だと依存は小となり，女児は罰が大だと依存は大である。受容度についても同様である。（Table 18）

3.　親が否定的で罰が大であるものの極端なものをとると依存性は小となり，肯定的で罰が小の極端なものをとると依存は大となる。（Table 20）

4.　依存が大で攻撃性が大なるものは，罰が厳しいものが多い。（Table 24）

5.　依存は女児に大である。（Tabl　）

以上の結果を総合して，依存性の規定要因として次の点をあげることができる。

(1)　依存が許容され，依存が強化されると依存は大となる。(3)

(2)　依存が拒否される場合，フラストレーションにより，依存欲求は大となる。(1，2，4)

(3)　社会的要因として依存が承認される場合，依存は大となる。(5)

Ⅲ　攻撃，非協力，優位，エネルギー，従属，愛情の諸行動変数の個人別プロファイルをつくつて検討した結果，8行動類型に分けることができた。それぞれの行動類型と関係のある親の態度とあわせて要約すると次のとおりである。

A_1　攻撃的で活発で，優位に立ち，従属度も大で愛情も大なもの――母親は子どもに対して肯定的で受身，罰は厳しく受容度大である。（Table 22，Fig. 2）

A_2　攻撃的で活発で優位にあるが，人の働きかけに対して従順に応じないことが多く，愛情を示すことが少ない――母親は拒否的で，罰が厳格で受容度小である。（Table 23，Fig. 3）

A_3　攻撃を示すが，優位でなく，従属的でなく，愛情も示さない。依存は大である――母親は肯定的で積極的で厳格である。（Table 24，Fig. 4）

B_1　攻撃的でなく，活発でなく，従属的でなく，愛情を示さず，全般に動きが少ない――母親は否定的で，積極的なものが多い。（Table 25，Fig. 5）

B_2　攻撃的でなく，活発でないが，従属的であり愛情深い――母親は肯定的受動的，寛容で受容度大である。（Table 26，Fig. 6）

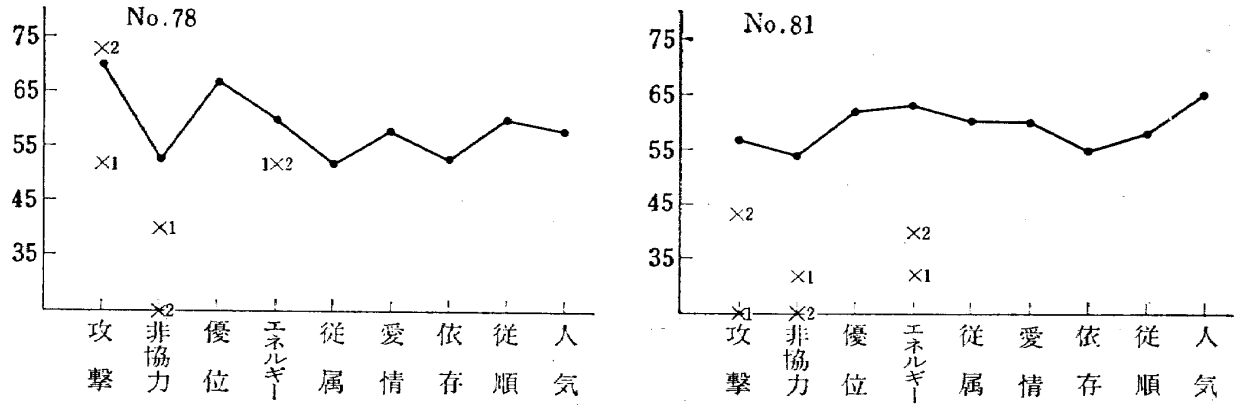


Fig. 2　行動類型 A_1　×1はドルプレイ第1試行における得点を示す。×2はドルプレイ第2試行における得点を示す。

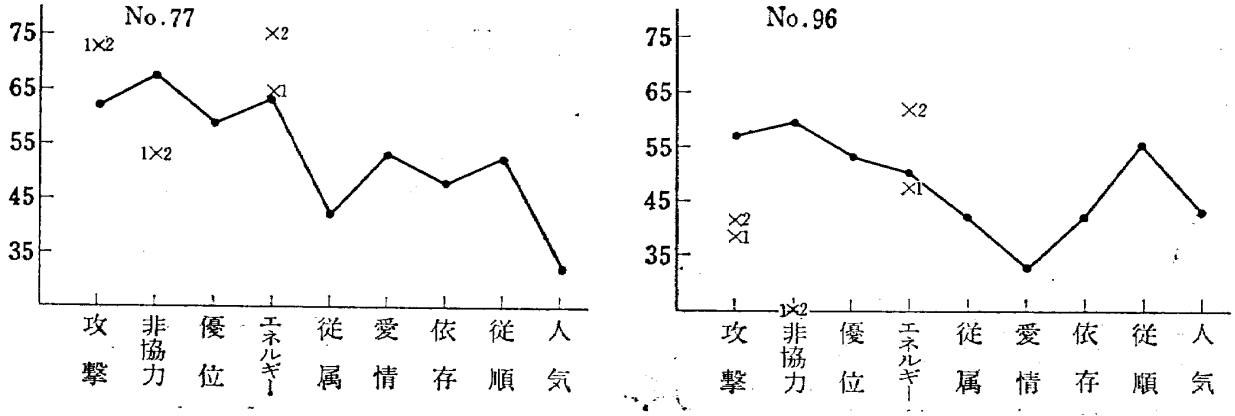


Fig. 3　行動類型 A_2

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

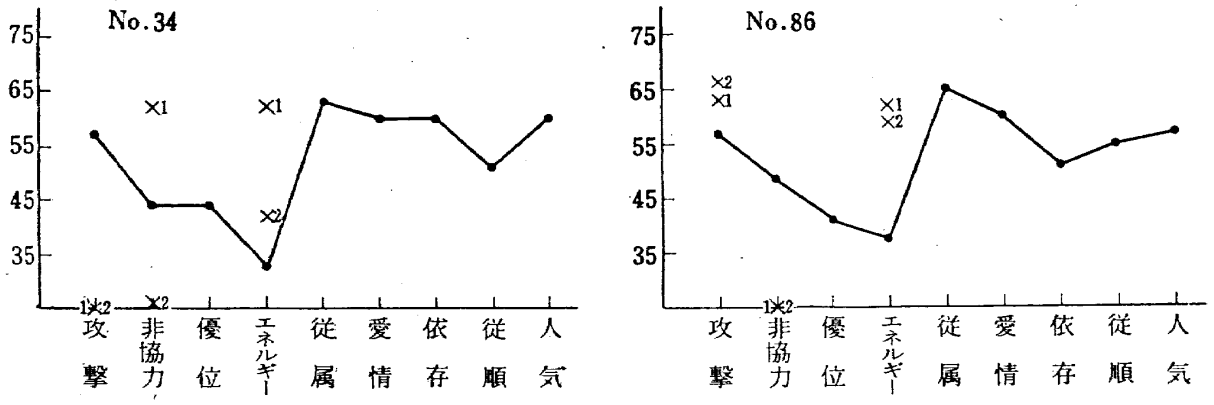


Fig. 4 行動類型 A^3

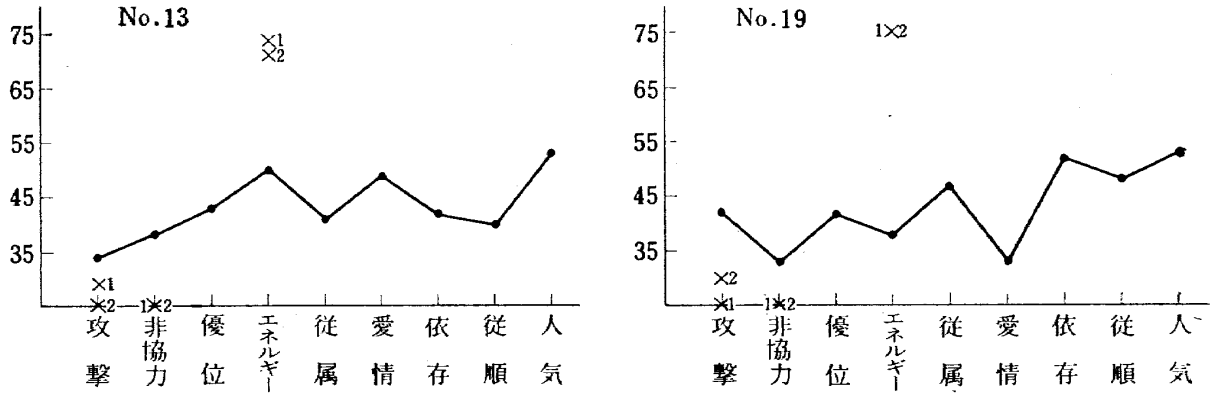


Fig. 5 行動類型 B_1

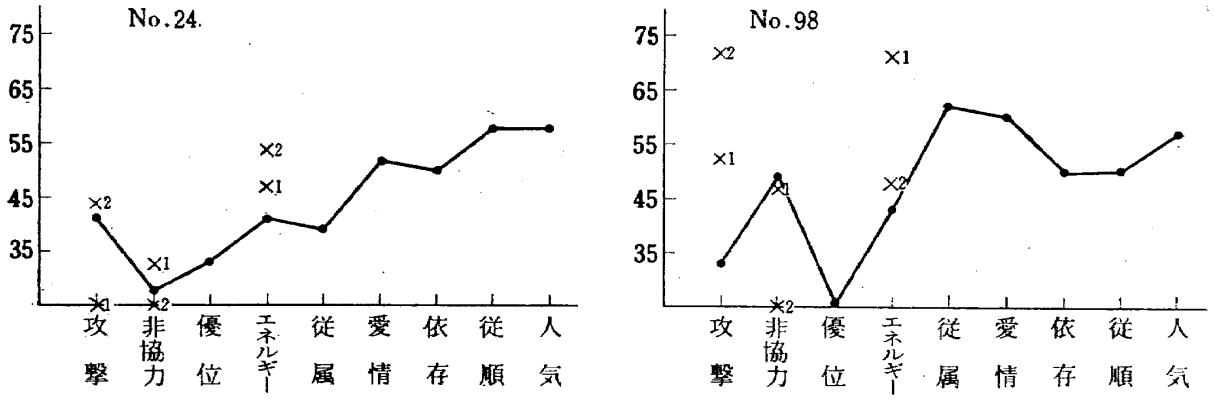


Fig. 6 行動類型 B_2

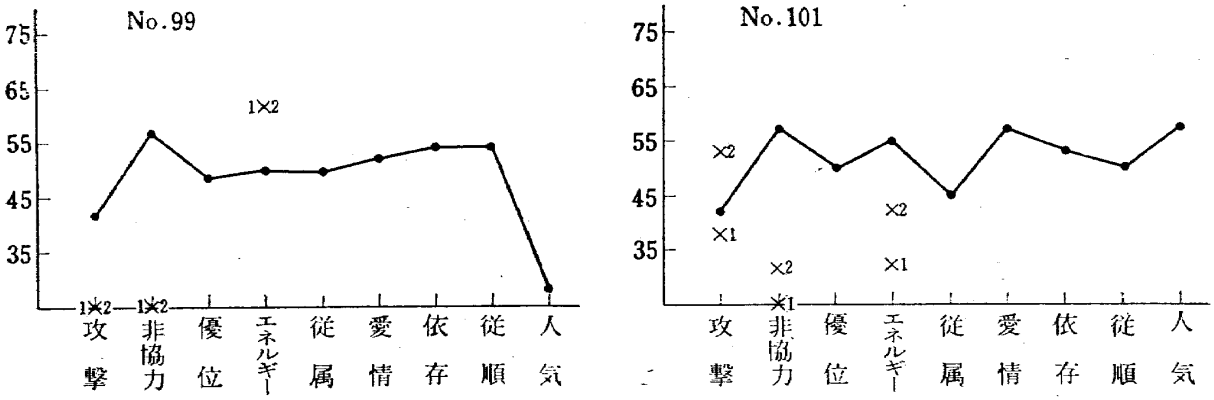


Fig. 7 行動類型 C_1

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

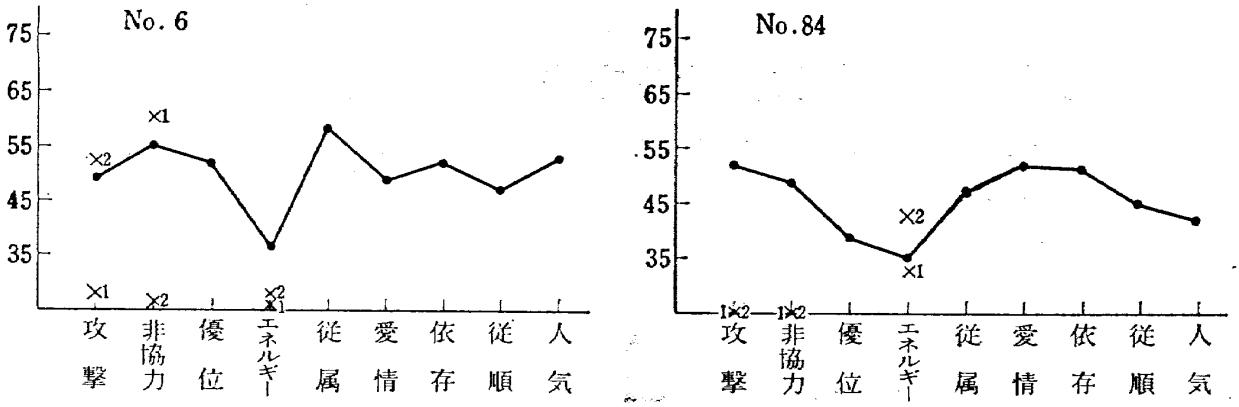


Fig. 8 行動類型 C_2

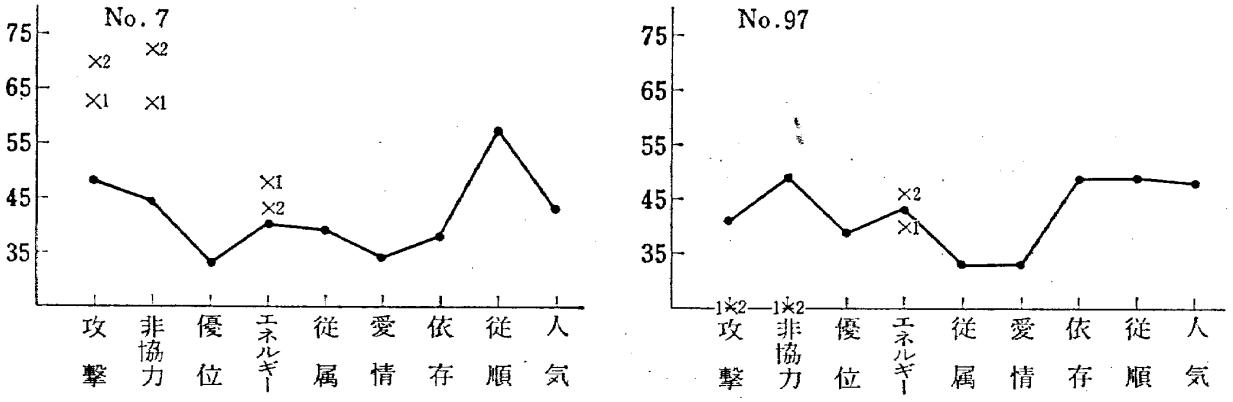


Fig. 9 行動類型 D

C_1 全体に平均的で，表面的には顕著な特徴が認められない——母親の態度は受容度大である。(Table 27, Fig. 7)

C_2 全体に平均的だが優位でなく，不活発である——母親は否定的積極的である。(Table 28, Fig. 8)

D 形の上でどれにも入らないもの (Table 29, Fig. 9)

以上の行動類型はドルプレイとも関連をもつことが示された。

文　献

(1) Sears, R. R., Whiting, J. W. M., Nowlis, V. and Sears, P. S.: Some child rearing antecedents of aggression and dependency in young children. *Genet. psychol. Monogr.*, 47, 1953, 135-234.

(2) Sears, R. R., Maccoby, E. E. & Levin, H.: *Patterns of child rearing.* Row, Peterson & co., 1957.

(3) 津守　真，稲毛教子：幼児の依存性に関する研究—依存性と親の養育態度および従順性の相互関連について—. 教育心理学研究，1960, 7, 16～26.

(4) Hartup, W. W. & Himeno, Y.: Social isolation vs. interaction with adults in relation to aggression in preschool children. *J. abn. soc. Psychol.*, 1959, 59, 17-22.

(5) Chance, E.: Measuring changes in the family of a four-year-old during treatment. in *Emotional problems of early childhood.* ed. by Caplan, G. 1955, 117-149.

(1961年8月17日　原稿受付)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ABSTRACTS*

DEVELOPMENT OF THE CHILD'S PERSONALITY AND THE PARENT-CHILD RELATIONSHIP

by

Makoto Tsumori; Keiko Isobe; Masako Shimosaka, *Ochanomizu Women's University*, Yayoi Nishina, *Tsuda College and* Kazuya Nagatsuka, *University of Tokyo.*

The child's personality develops in the dynamic relationship between parents and children. This study tried to measure the relationship of the child's personality and to the mother's attitudes by several means.

A Subjects: Subjects were seventy-one kindergarten children of four and five years of age and their mothers. The intelligence of the children and the socioeconomic status of their families were quite high.

B Methods: I. Each child's personality was measured by the following ways. (1) By observation of behavior in free situations using the time sampling method, twenty samples of three minutes observation and a total of sixty minutes for each child, were obtained. Categories of observation were: aggression, ascendency, non-cooperation, submission, dependency (to teacher and to child), affection, energy. Fairly high reliability of observations was shown by the agreement of two observers (420 minutes) and by the split-half method. The teacher's evaluation of a child's personality showed high agreement with the results of observation. (2) Through interviews with mothers, dependendy and conformity in the family were evaluated in the same way as the evaluation of the mother's attitude. II. The mother's attitude was measured by the following ways. (1) The mother's interview, utilizing illustrations of fifteen situations of mother-child contact, was conducted for all cases by one staff member and evaluated in terms of punitiveness and acceptance of dependency by two evaluators. (2) A questionaire was constructed to measure mother's attitudes (x—general social attitude, y_1—opinion of child rearing, y_2 — practice of child rearing, z — grandparent's attitude toward child rearing). Two axes, Positive-Negative and Active-Passive were taken. The result was analyzed by the Likert method. III. Doll play. Two sessions of twenty minutes non-directive doll play were conducted individually. Some of the sessions were conducted by a male experimenter and some by a female experimenter. Categories of observation were — aggression, negative feeling, observation, manipulation, dependency and affection.

C Result and Discussion: I. Development of aggression and mother's attitude. (1) The child's aggression tends to be greater when the mothers exhibit more frustration to children, being more punitive. (2) For boys, many whose mothers are not punitive are aggressive. (3) For girls, many whose mothers are punitive are less aggressive. (4) Those who are less aggressive in the hypothetical situations, mothers being punitive, tend to be more aggressive and active in doll play. (5) Those who are less aggres-

* We owe editing of English abstracts in this issue to Dr. Ray Simpson at the University of Illinois.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

sive in the family, mothers being punitive, are more aggressive in kindergarten and doll play. (6) Mothers of those who are more aggressive and also those who are greater in submission and affection are more punitive, acceptant and positive in attitude. Mothers of those who are more aggressive and less in submission and affection are more punitive, rejecti ve and less acceptant. (7) Mothers are more punitive for boys. (8) Boys are more aggressive than girls. (9) In doll play, male experimenters provoke more aggression in children and the amount of increase of aggression in the second session is greater in the cases of male experimenters.

The following factors of aggression were discussed: (1) Social admission — males are more active in role. (2, 7, 8, 9, in the above) (2) Frustration — aggression factor. (1, 6) (3) Identification — being identified with aggressor, children are more aggressive. (6, 8) (4) Aggression anxiety — aggression is inhibited when aggression is followed by anxiety. (3, 4, 5, 9) (5) Fantasy expression — aggression inhibited in the real situation is expressed in fantasy. (4, 5)

II. Development of dependency and mother's attitude. The following results are pointed out in this study. (1) Mothers of those who are more dependent in kindergarten as well as in family are more rejective and negative. Mothers of those who are less dependent in kindergarten while dependent in family are more acceptant and positive. (2) Boys are less dependent, mothers being more punitive. Girls are more dependent, mothers being more punitive. (3) The extremes of those whose mothers are more punitive and less acceptant are less dependent and the extremes of those whose mothers are less punitive and more acceptant are more dependent. (4) Mothers of those who are more dependent and more aggressive are more punitive. (5) Girls are more dependent than boys.

Following factors of dependency were discussed: (1) Dependency being accepted and reinforced, depenency becomes greater. (3 in the above) (2) Dependency being rejected and frustrated, dependency becomes greater. (1, 2, 4) (3) Social admission — dependency is more admitted for girls. (5)

III. Personality patterns of children and mother's attitude. Behavior variables, aggression, non-cooperation, ascendency, energy, submission, affection were profiled for each child and eight behavior patterns were classified. These are summarized in the following, in addition to mothers' typical attitudes for each pattern.

A_1: Aggressive, active, ascendent, submissive and affectionate (all variables high in scores) — mothers are positive and passive, punitive and acceptant. A_2 :Aggressive, active and ascendent, but less submissive and less affectionate — mothers are negative, punitive and less acceptant. A_3 : Aggressive, but less ascendent, less submissive, less affectionate and more dependent — mothers are positive, active and punitive. B_1 : Less aggressive, less active, less submissive, less affectionate — mothers are negative and active. B_2 : Less aggressive, less active and more submissive and affectionate — mothers are positive, passive, less punitive and acceptant. C_1 : All variables at an average level and no particular characteristics shown on surface. — Mothers are acceptant. C_2 : Most variables in average level but less ascendent and less active — mothers are negative and active. D: Not determined.

It was shown that the above behaviror patterns were related to doll play behavior.

NII-Electronic Library Service